フィールド（現場）からの風 ㊼

宮田守男

コロナ禍の時だからこそ、他の取り組みを体験する事も大切だ

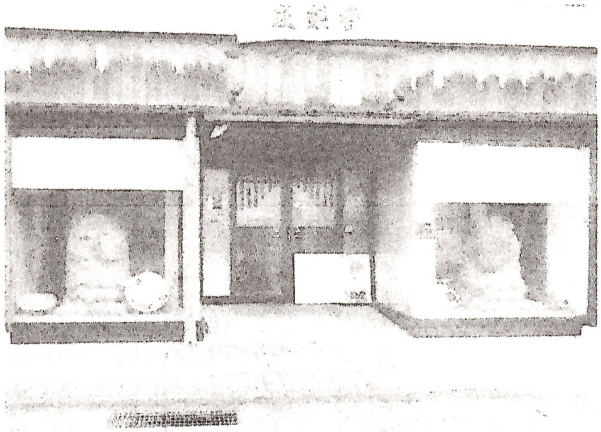
コロナ禍の長期化で訪日外国人が激減、ホテルや旅館に泊まる宿泊が大きく落ち込んでいる中、星野リゾート・星野佳路代表が発信する情報が注目されている。株式会社星野リゾートは、本社を長野県軽井沢町に置くリゾート運営会社だ。軽井沢に星野温泉旅館を開業、軽井沢を国際的なリゾート地にと貢献した企業だ。所有を本業とせず、運営会社を目指した企業の将来像は、過去のバブル崩壊や、不良債権処理、リーマンショックなどの危機から学び、今回のコロナ禍でも、困難な観光業へのニーズに対応できるのだろう。

厳しい状況が続く中で、現状の生き残り策とコロナ禍後の日本の観光戦略へのインタビューで星野さんの回答が心に残る。「旅行需要を盛り上げると3密を回避しにくい状況になる。盛り上げると言うより下支えをする発想が大事」「日本の観光市場は22兆円の国内市場と海外旅行市場の3兆円、この25兆円の市場があれば、インバウンドがなくても必ず生き延びられる」「コロナ禍が終わった後の回復には、人材を維持しなくてはいけない。コロナでリストラをしてはいけない」「危機に強い観光として、自宅から近場を旅行するマイクロツーリズムへの対応強化が必要」などを語る。

一度は、星野グループの施設を利用したいと思う。受託施設は、和のリゾートホテルの「星のや」、温泉を備えた客室50部屋以下の和風旅館の「界」、リゾートホテルの「リゾナーレ」だが、地域に参考になるかと「界」を選択し「界・加賀」に宿泊する。GoToトラベル割引を利用、和室ベッド露天付き・「のどぐろと鮑」の会席コースを選択する。施設は、ローベットとソファを配置した広い空間に随所に伝統工芸をちりばめた、伝統とモダンが融合した部屋だった。

食事処は、障子に囲まれた半個室のプライベート感で他のお客様との密が感じられない構造は、これまで団体客対応の宴会タイプの施設の利用が多かったためか新鮮な時間を楽しめた。

だが期待した分、想いと異なる場面には逆に強い印象を持ってしまう。旅館の周辺の一角は、確かにリゾートらしさが伝わってきたが、地域を散策すると、温泉街は閑散とした寂しさ。海外旅行から国内旅行への取り組みには、宿泊施設の取り組みだけでは、困難なのかと強く感じてしまった。（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）



山代温泉街の施設の売り物件が観光地の現状を強く印象付ける